

「研修会等名称」

2023 年度関西大学教育改革実践フォーラム

「VUCA 時代の大々社接統を考える：卒業生調査をどのように教育改革につなげるか」

場所：関西大学梅田キャンパス 8 階

期間：2024 年 2 月 17 日 1300-1700

1. 研修の内容

今回のフォーラムは、大々社接統を考えるものであり、とくに卒業後の Well-being のために、どのような教育改革が有効であるかを考えるものであった。

当初、岡田忠克副学長から開会挨拶がなされ、関西大学の状況が概観されたのち、山田剛史教授より趣旨説明がなされて、フロアに集まった大学関係者の勤務校における状況確認が行われた。128 名の参加者が 87 機関から集まっていたが、卒業生調査はそれなりに行われているものの、それが教育改革に有効に活用されている例は非常に少ないことが分かった。大々社接統のための卒業生調査は、経営面からは将来の自学入学者を獲得するための自学ブランディングに繋がるとともに、教学面からは教育効果の有効性の確認や大々社接統の実質化に効果があることが語られた。

基調講演は、リクルート進学総研所長の小林浩氏から「社会環境の変化と大学教育への期待：高大社接統の視点から考える」と題して行われ、今後の社会に求められる資質能力として、当事者意識をもって主体的・能動的に変化に対応できる力が必要とされてきていることが示され、「Active Learner を育てる」ことが重要であることが語られた。

続いて、関西学院大学における在学生・卒業生調査からみた長期的な教育効果の検証について情報が共有され、関西学院における IR のあり方と、正課外教育を含む広義の学修成果について「真に豊かな人生」にどのように結びつき、それをどのように可視化していくかが示された。

次いで、横浜国立大学における卒業生・就職先調査の事例が紹介され、心理アセスメント「BEVI」と紐づけた学生ポートフォリオの活用例や、卒業生調査と企業側調査の分析結果が具体的に示された。

最後に、関西大学における卒業生調査の分析結果が紹介され、「卒業生は幸せなのか」について詳細なデータをもとにした資料が提供された。

その後、休憩をはさんで、フロアディスカッションが展開され、小集団での意見交換が行われたが、加納は中部圏の私立大学教員や首都圏の公立大学職員、関西大学の学生との 4 名で、実際の学生の声を聴きながら感想について共有を行った。

また、最後のパネルディスカッションにおいては、加納も発言の機会をいただき、会場全体と感想を共有させていただいた。その際に申し上げた感想は、簡潔に言うならば、今回のフォーラムにおいて明らかになったのは、そもそも大学入学時点で「Active Learner」であったものは、大学教育に対する満足度も高く、さらに就職後も「Happy」に業務をこなし、それが待遇面でも経済面でも高評価に繋がって「Happyな人生」を送っているということであり、身も蓋もなく言うならば、(もちろん大学においても「Active Learner」を育成する努力は当然行うとしても) そもそもいかに「Active Learner」を学生として入学させるかということが重要なのではないかと、いうものであった。

2. 研修の成果

今回のフォーラムは、上述の通り、具体的な調査による膨大なデータに裏打ちされた、たいへん実りの大きいものであり、様々な示唆を受けた。本学において、その示唆を活かせるものとしては、次の2方向が考えられよう。

(1) 高大社接続を可視化するものとしての調査実践に関する先行事例として

まず、本学においても、在学生調査・卒業生調査、さらには卒業生に対する評価に関する企業等への調査の実施において、今回のフォーラムで紹介された各大学の取組も参考にさせていただきつつ、見直しを行うことが可能である。教学担当副学長として、可視化されたデータに立脚した高大社接続への建設的な取組は非常に重要なものと認識しているので、今後の業務において活用していきたいと考えている。

(2) 高大社接続において、大学として何をなすべきであるのか

本学に縁あって入学いただいた学生が、卒業後にいかに「ハッピー」な人生を送るかは、大学としても最大の関心事であるとともに、それが十分に達成されて大学ブランドとして確立できれば、そのような将来を目指す入学希望者をコンスタントに獲得できることとなる。この点において、卒業後に「ハッピー」に人生を送るために大学として何をなすべきであるのかは、今後も不断の調査を行って可視化していかなければならないが、本フォーラムにおいて明確になった点としては、まず**課外活動も含めた全般的な学修成果が不可欠である点**、また自ら「**Active Learner**」となれるように**人材を育成することが重要である点**については、明らかになったように考える。これらが実現できるような教育環境を整備していくために何ができるのか、引き続き考えてゆきたい。

3. 授業への研修成果の反映状況

今回のフォーラムは、狭義の「授業」に留まる内容ではないが、「授業」については、やはり「Active Learner」育成のための方向付けをいかに行っていくかが重要であろう。その点で、「演習科目」などは、その方向性に最も寄与するものであり、卒業研究の作成において、「Active Learner」となるような方向付けをさらに強化していく。また、その他の授業においても、自ら主体的に取り組むことの楽しさが、自分でわかるようになるための仕組みを、さらに整えていきたい。

学部長	学習・教育支援センター委員長	学習・教育支援センター委員会	名古屋教務課長	係